慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	昭和六三年度卒業論文題目；昭和六三年度修士論文題目・ 要旨
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	1990
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.59, No.1 (1990. 3) ,p.155- 169
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19900300-0155

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

彙報

昭和六三年度卒業論文題目

国史学専攻

（志水正司担当）

藤原鎌足をめぐって　渡辺浩江

持統天皇と吉野行幸　小林由

大津皇子の「謀反」事件について　飯島渉

文献と木簡から考えた長屋王像　西岡真理子

鑑真における戒律について　佐藤直子

光明皇太后と紫微中台　山田奈緒子

奈良朝後期における女官の動向　猪谷裕之

（高橋正彦担当）

平氏政権の東国武士団統轄についての一考察　平井信太郎

源義経について　佐藤美子

鎌倉幕府初期の合議について　清水宣彦

六波羅探題に関する一・二の論点
—成立当初の活動を中心に—　滝川徹

南北朝初期鎌倉府執事の性格について
—高師各・上杉憲顕を中心に—　磯崎達朗

豊後国大友氏一族における女性の経済的地位　小早川典子

備後国地毘庄における山内首藤氏の勢力拡大について　武田祐継

佐々木道誉の文化活動について　三尾直子

室町幕府奉公衆の奉公形態に関する若干の考察
—竹原小早川氏を中心に—　加藤彰

戦国大名今川氏の検地について　江間利弥

（高瀬弘一郎担当）

「鎖国」の概念について　幸田浩実

鎖国時代の長崎貿易

—長崎地下利銀の配分を中心に—　寸島　努
（坂井達郎担当）
幕末の国学者大国隆正に関する一考察
—明治維新とのつながりにおいて—　今泉章世
北海道（蝦夷地）開拓と東本願寺　入江信一
福沢における「旧藩情」の成立　大久保忠宗
軍人の政治関与と統帥権の独立　大脇敦子
開国の過程における植民地化問題　上修朋徳
民権勢力分裂期における地方政社の動向
—顕猶社と融貫社を中心として—　拵健一郎
幕末・維新期における日朝外交と対馬藩　黒田典子
藤井能三
—業績と影響をめぐって—　後谷誠二
森有礼の思想形成
—イギリス留学時代を中心にして—
（宮崎洋担当）
東京裁判における「全面的共同謀議」問題に関する一考察　坂本桂太
歴史変動と都市　杉本真吾
国務省知日派における天皇制存続論の展開　詫摩典子
民法典論争に関する一考察
—その解釈をめぐって—　田代久美
国体と天皇機関説問題
—蓑田胸喜を中心にして—　沼野恵
高橋是清の財政思想と政策に関する一考察　平田佐久子
巌本善治
—キリスト教的女子教育思想について—　平田次郎
西洋史学専攻
（清水祐司担当）
南北戦争後の黒人教育とB・T・ワシントンをめぐる
論争についての考察　吉田恭子
（宮崎洋担当）

千代仁

英仏対立抗争史―戦争とその国民性との関わりについて―　小栗契子
ポルトガルの植民過程にみる現代ブラジル社会の特質
―スペインとの相違―　小林葉子
マキァヴェリの思想について　渡辺幸照
ジプシー―誤り伝えられたその姿―　五十嵐佳世
ルネサンス・フィレンツェ―そのダイナミズムの所以―　秋山聡
一九世紀アメリカの再建期におけるネグロの動向
―サウス＝カロライナの場合―　中森敦子
インドにおけるイギリス植民地政策とその影響　永井優子
文化としてとらえた活版印刷技術の機能と意義　山本祥之
アメリカ公有地処分の変遷―開拓農民と民主主義―　和田直子
アメリカ合衆国憲法―制定過程と憲法からみたアメリカ―　内匠屋太
一九世紀パリ・レストラン産業―食の民主化は実現されたか　田中桃子
黒人奴隷貿易がアフリカ社会に与えた影響について　片野ゆかり
（東畑隆介担当）
ロシア農奴解放の研究　秋山いく子
国連の平和政策について　開知典
奴隷制度をめぐる南北の政争　櫨川朋浩
プロイセン関税法の成立　今川玄
フランス旧制度末期における貴族階級没落の背景について　岡西さとみ
自由主義の敗北―プロイセン憲法紛争　中西猛
一九世紀ドイツにおけるユダヤ人解放運動と反ユダヤ主義　並木由美
アメリカの建国とその理念―トーマス・ジェファーソン　篠原茂
フランスのマグレグ植民地支配　田口雅人
日本の西欧近代科学受容　増永淳

一九世紀から二〇世紀初頭におけるイギリス労働運動とその政治運動について　渡辺　幸
（米田治担当）
二〇世紀におけるイギリス保守主義の展開　浅川岳彦
スペイン第二共和制初期における教権政争　天野　哲
新植民地主義とアルジェリア移民労働者　大場奈津子
一六、一七世紀におけるオランダ産業構造とオランダ東インド会社　小林　亨
カール・マンハイムのイデオロギー論　柴田泰邦
一九二〇年代の国際金融構造―ロンドン・ニューヨーク市場を中心として―　杉山秀樹
スペイン内戦前夜におけるカタロニア分立主義　高木順正
現代アメリカの貧困と黒人問題　塚原秀樹
アメリカ独立革命初期におけるペンシルヴァニア憲法の成立　豊田将三
戦後アメリカの対日政策と日本国憲法の制定過程　仲村渠千鶴子
チリのフレイ政権の経済政策　野上周
〝土地戦争〟―アイルランドナショナリズムについての一考察―　野田洋子
ルソーにおける〝個人〟の問題　八景義行
ガンディにおけるヒンドゥイズム　広川敦子
オーストラリア労働組合の発展過程、一八五一年―一八九〇年　藤岡洋子
イギリス経済衰退論についての一考察　松永訓伸
現代アメリカにおける二ケ国語教育の問題―メキシコ系アメリカ人を通して―　松田悦子
一九世紀カナダにおける責任内閣制の成立過程　宮村潤一
F・D・ルーズベルト政権の対外政策における経済的要因―その市場拡大構想―　矢島ゆき子
マルチン・ルーサー・キングの非暴力抵抗運動論

—その思想と戦術についての考察—　矢部雅之
一九世紀イギリスの綿工業と多角的貿易構造　山田泰郎
東洋史学専攻
太平天国の婦人政策をめぐる評価について　石谷いづみ
エジプトのシリア支配とシハーブ家　大河原知樹
一三世紀の西アジアと東アナトリアのキリスト教徒
—バルヘブライオスの年代記から　太田卓志
ニザーム＝アルムルクの理想と現実　木本吉信
カーゾンの見たイラン・カジャール朝と帝国主義　菅野陽子
中国古代の健康観—馬王堆三号漢墓導引図を中心に　成田康仁
東アフリカ沿岸都市社会の歴史と性格—キルワ年代記を中心に　西田千恵
後ウマイヤ朝時代のコルドバ　浜田美樹
容閎とその官人観について　平塚葉子
秦力山（一八七八～一九〇六）について　安岡正智
一六世紀のインド洋世界—イエメンの状況を中心に　和田成弘
民族学・考古学専攻
クック諸島プカプカ環礁の社会変化　塩崎豊
ウガリットの社会構造　小林安芸子
ミイラの製造法とその変遷　木村玲子
近世土人形発生時期に関する試論　内山洋一
縄文後期貝塚における貝類組成の分析　牛村守
貝塚における動物骨の残存率について　芝本理香
江戸時代遺跡出土の焼塩壺について　坂井佐智代
東京におけるエスニシテ—イスラム教徒を中心に—　岡村陽子
沖縄久高島の祭司組織と社会変化　神戸さえ

照葉樹林文化―学説とその展開　宮本誠一
論学術上のアイヌ問題―いわめるアイヌ研究者を中心に　松川智充
通信教育課程（丙類）
六十三年九月卒業
中世賤民の考察　笹野豊
越後における戦国大名領国の形成　諸井幸枝
ドイツ人の反ナチ抵抗運動
―七月二十日事件を中心として―　石崎真由美
近代日本におけるアジア侮蔑観　熊沢路子
平成元年三月卒業
茅ケ崎における関東大震災時朝鮮人虐殺の歴史的一考察　高月雅子
世阿弥の生涯　昼間春美
摂関政治
―藤原氏と貴族政権―　松田孝
薩摩藩と第二次長州征伐
御物粘葉本倭漢朗詠集〈かな〉小考　黒須達男
アメンホテプ四世の宗教改革　早川信子
身分制度
―江戸時代被差別層を中心に―　牧内淑晃
初期鎌倉幕府体制と佐々木一族　吉成博子
一七世紀オランダ社会とレンブラントの生涯
（信仰と芸術）　野村茂雄
エンキの人類創造とエレミアの人間観　安藤美穂子
「将門記」における私闘の原因と伴類
―作者像の私考―　福田光子
唐代の衣服　青木ヤス子
塩鉄会議
―西漢武帝における確執―　岩田恵子
薬師寺についての一考察　翁邦彦

我国博物館活動を通してみた
—中南米文化への関心—　佐藤　肇

ネフェルトイティの国際結婚をめぐって　谷岡優子

オランダ統治下のジャワにおける強制栽培制度に関する一考察
—オランダ植民地政策の集大成として—　本多裕子

大政奉還への動向における一考察
—(船中八策からの変遷)—　横山正智

アテナイにおけるメトイコイの起源と地位　池田幸生

茶の湯の成立とその展開
—堺と町衆の茶湯を中心に—　上野恵子

後北条氏の領国支配について　尾崎紀子

花押について　門松敬子

鎌倉幕府の成立
—源頼朝を中心に—　兒玉浩人

弥生時代のいわゆる高地性集落についての一考察
—山口県の集落遺跡の垂直的分布—　三上茂

昭和六三年度修士論文題目・要旨

国史学専攻

平安後期における荘園整理令と地方支配
—長久・寛徳年間以降を中心に—　有福史博

鎌倉幕府前期発給文書と執権制
—建仁から寛元までの下文・下知状を中心に—　小淵忠司

律令体制初期における和同銭の流通　佐藤秀成

西洋史学専攻

「スキタイの定住化プロセスについて」　杉山忍

近代に至って民族国家に従属させられ、現代では最大の社会統合の単位である国民国家に包含されるまで、古来ステップの遊牧民は比較的自由な、自発的な社会発展の機会を与えられていた。しかし、その発展のプロセスはけっして一様なものではなく、地域と時代によって様々な相違がみられる。これは、各々の民族がどのような文明、文化と接触したかによっても大きく左右されているように思われる。すなわち、遊牧社会の発展

に関して考察する場合には、その遊牧社会が主に接触したところの諸文化の性質について把握することも重要なのである。とりわけ、中国、オリエント等の中枢的文明とその周辺文化（これらはオアシス国家にも流入している）の影響力の大きさは、それらに隣接した地域の遊牧民がしばしば強力な王朝を完成させていることからも看過することはできないだろう。

北アジアの遊牧社会に関しては、しばしば中国王朝との密接な関わりの中でその歴史的役割が論じられ、様々な類型化の試みがみられる。黒海北岸、東欧へと進出した遊牧社会の文化変容について論ずる試みも、これと同様の意義を有するものであろう。その中で、文献上最古の騎馬遊牧民であるスキタイは、ヘロドトス以後フン族の到来に至るまで、ヨーロッパの多くの古典作家によってさまざまな騎馬遊牧民族の代名詞として用いられることとなった名称であり、ユーラシア西部に対して彼らが与えたインパクトの強さとその重要性というものをうかがい知ることができる。

本稿では、発展の全体的な流れを背景に、ヘロドトスが記録に残したところの、特に重要と思われるプロセスの分析を試みた。

スキタイなどを含む北イラン系遊牧民は、前一千年紀の初めには完全な騎馬遊牧社会への移行を経験した。卓越した機動性を有する騎馬遊牧民は相互に、同時に広範囲に亘って衝突を繰り返すようになり、しばしばいくつもの遊牧部族を同時に歴史的移動へと駆り立てた。前七世紀前後にはその大きな余波が西アジアおよび南ロシアの一部を巻き込み、諸文明の記録において注目されるところとなったが、その中にアリステアスやヘロドトスが報告するところの「スキタイ」が含まれていたのである。

スキタイ系の部族はアッシリア終末の混乱に乗じて広範囲にわたり西アジアを蹂躙したが、やがて定住文明の反撃にあって駆逐され、前六世紀はじめには南ロシアのステップ地帯を自らの勢力範囲とするようになる。この地方には先行する定住文明もなく、西アジアの抗争で経験を積んだスキタイ騎馬弓手に対抗しうるようないかなる部族も存在しなかったが、高度な文化を擁するギリシャ人の植民市が黒海西岸から北岸にかけて建設されていた。周辺の先住農耕部族を支配下におき、ギリシャ人と接触するようになったスキタイ系部族は、部族連合を形成し再び牧主農副経済へ移行しはじめるが、その動きは既に確立されていた根強い騎馬遊牧社会の伝統と容易に調和しうるものではなかったため、スキタイ社会内に多くの文化的葛藤を生じた。またこの地域は、ギリシャ文化の出先機関ともいうべき植民市のほか手本となすべき定住文明のない後進地域であり、そのギリシャ人の文化にしてもスキタイが創設すべき領域統治システムに役立つものではなく、ただ支配層の嗜好にあった産物の輸入によって限定的に採用され、一部のスキタイのギリシャ化を促したにすぎなかった。

スキタイの社会は、ヘロドトスの時代にはすでにある程度周囲と同化しはじめた、牧農並存社会であったが、その中心にお

いては支配部族である「王族スキタイ」の伝統的文化が依然根強く保持されており、それはまさに東方において育まれた騎馬遊牧文化そのものとも言えるものであった。しかしその一方で、一部の文化的要素は既にギリシァ等の影響を強く受けはじめていたことも明らかである。伝統を昇華しながら文化の複雑化を進めていくとき、スキタイ独自の国家建設も可能であったろうが、彼らはそれに失敗したようである。すなわち前四世紀に最盛期を迎えたかと思うと、その直後急速に自己のアイデンティティを失い、解体していったのである。

ラロトンガ島のヨーロピアン・コンタクト
―近代西洋文明の衝撃―

齋藤雅美

地球の表面積の四分の一を占める広大な海域と点在する無数の洋島から成るポリネシア。そこに住む人々は紀元前以来、実に千年以上の時間をかけてこの地域へ進出し、各島嶼で比較的孤立を保持しつつその島独自の自然環境に適応した伝統的文化を形成していった。この孤立を打破し伝統的文化に強い衝撃を与えたのが、近代以降の西洋列強の進出である。衝撃がそれ程破壊的でなかった社会も多かったが、その場合にも人々は圧倒的に強大な西洋文明との接触の中で新たな適応への道を模索する事となった。ラロトンガはそうした事例の一つである。

本論ではラロトンガの土地利用システムに焦点を当てた。技術・社会組織・宗教等伝統的文化の諸要素がからみ合い織り上げられた土地利用システムは、閉鎖的な島嶼環境への適応努力を通じて醸成されてきた文化の「核」ともいうべきものであったが、西洋との接触はこのシステムを少しずつ破綻させ、ラロトンガの人々に新たな適応を迫っていったのである。本論では第一に伝統的土地利用システムの再構成を試み、第二に西洋との接触以後の変化とそれが惹きおこした諸問題について検討した。

伝統的社会において生存の基盤たる土地は、共通の父祖を頂く集団によって共同保有され、世代を経て受け継がれるべきものであった。土地の配分や利用、収穫の集積と再配分等にあたっては集団の長、首長が一定のリーダーシップを保持した。また面積が小さく孤立した環境の下で、限られた土地資源を過度に疲弊させる事なくその効率的利用を促す努力が進行した。生態系としても安定したタロイモの集約的な水耕栽培・首長の権威の下にはかられる資源保全、分散した居住形態、養取慣行等はそうした努力の一つといえる。

一九世紀に入ると英国人宣教師達がこの閉鎖的な社会へ西洋文明をもたらした。彼らは又、島民にとって未知の伝染病をも持ち込んだので、島民人口の激減の中、在来の神々の破棄とキリスト教の受容は急速に進む。この大変動に対するその時点での社会の適応として、伝統的権威者たる首長達に権力が集中するが、島外の西洋人との貿易の開始は首長制に基く集積と再配分のシステムを徐々に破綻させ、土地の共同保有制と首長の土地支配は、多くの島民の生活を圧迫するようになった。

この状況を打破し伝統的社会を市場経済に従属する生産地へと転ずべく、二〇世紀に入ってニュージーランド植民地当局は首長の権力を排除し、経済的個人主義を開花させようと試みる。植民地統治下に島民の生活は貨幣経済への依存を強めるが、新しい商業的な土地利用形態は島嶼環境に適合し難く、伝統的な土地共同保有の下では順調に定着しなかった。島民は試行錯誤を重ねつつ自ら新たな土地利用システムの形成へと乗りださねばならず、その過程で父祖伝来の土地を捨て、島を離れる事を選んだ者も多かったのである。

西洋との接触は、これまで閉鎖的な島社会で生活してきた人々に父祖の地を離れて生きる新しい可能性を与えたが、島の過疎化は深刻な問題となった。しかし、西洋文明のもたらした価値観は既にラロトンガ社会に根づいており、これに基く適応への様々な努力は、もはや一個の島にとどまらず、拡がった新たな環境の下で、模索されねばならないのである。

東洋史学

北魏水徳採用の一考察

加藤太朗

『魏書』の序紀に、拓跋氏の祖は黄帝で、その黄帝の土徳を継いだ国家であると記されている。この世系記事については、白鳥庫吉・志田木動麿・内田吟風・田村実造の研究があるが、いずれも、北魏の徳が、土徳から水徳へと変更されたことを言及していない。

正式には、道武帝天興元年（三九八年）、漢人の名族清河の崔宏の建言により、北魏は、土徳の国家であると宣言する。時代が下り、北魏が華北をほぼ統一する。孝文帝太和十四年（四九二年）になると、再び行次（王行相生の配当）が問題とされ、五胡の政権を認めようとする高閭派（晋趙燕秦北魏 金水木火土）と、五胡政権を無視し、晋の金徳を承ける水徳と主張する李彪崔光派に二分される。本紀によれば、二年後の太和一六年に、水徳と決定する。

後代の類書・政書等も、この変更を記載するが、『資治通鑑』に次のような記事がある。

「北人謂土為拓、后為跋。魏之先於黄帝、以土徳王、故為拓跋氏。夫土者、黄中之色、萬物之元也、宜改姓元氏」（巻一四〇）

水徳と宣言した二年後の孝文帝の詔勅である。

この記事を手がかりに、「北魏の世系記事」・「五胡の五徳採用の真偽」・「水徳採用に至る事情」を考察したのが本論である。

アル・ムウタシムの時代
―史料の翻訳と注釈―

高田康一

アッバース朝の歴史、特にそのサーマッラー期については、その重要性にもかかわらず、基礎的な研究が遅れている。政治史についてすら信頼に足る記述が行われていない。筆者は当初、「マムルーク制度」の誕生をアル・ムウタシムの時代に探

ることを考えていた。しかし、上記のような研究状況に鑑み、アルムウタシムの時代についても、基礎的な作業が真に必要とされていることを実感し、主要な史料の翻訳を企図した。

その結果、タバリーの「諸王と諸預言者の歴史」のなかから、アル・ムウタシム（在位八三三～八四二）とそれに続くアル・ワーシク（在位八四二～八四七）のカリフ時代の記述を、訳者の手に余る詩を除いて、全訳した。

基礎作業としての注釈は、あらゆる事項について行うことは不可能であるため、登場人物について絞って行った。タバリー以外の関連諸史料にあたった結果、タバリーのみに登場し、情報を付け加えることが出来なかった人物も多かった反面、主要人物の複雑な血縁関係等を明かにすることが出来た例もいくつか存在する。（主要な家系については系図を付した）。

地名についても一覧表を付したが、注釈はテキスト理解に不可欠な最小限度にとどめた。

またタバリーとの比較の意味で、ヤアクービーの「歴史」のなかのアル・ムウタシムのカリフ時代の記述、同じくヤアクービーの「諸国誌」のなかのサーマッラーの記述（部分）も訳出した。ペルシャ語史料の例として、ガルディーズィーの史書中のアル・ムウタシムのカリフ時代の記述の訳も掲げた。

第一次イラン・イラク戦争とアッバース・ミルザの軍事改革

大川　登

一八世紀末に成立したカージャール朝は、これ以前のいくつかのイランの王朝と同様に、遊牧民をその軍事的な基盤としていた。支配部族であるカージャール部族と各地方で半ば独立した権力を有するさまざまな遊牧民部族との勢力の均衡のうえに成り立っていた王朝であった。

一方、ちょうど同時期から強まってくる西欧の諸列強やロシアの圧迫は、カージャール朝支配者に「軍事改革」とよばれる改革を強いることになる。それはヨーロッパの優秀な火器を導入しヨーロッパ人士官の訓練を受けることからはじまって、カージャール朝の軍隊編成を根本的に改めることを試みるようにまでなる。

具体的には、ファトフ・アリー・シャー（在位一七九七～一八三四）の時代に、その皇太子でアゼルバイジャンの知事でもあったアッバース・ミルザが中心になっておこなわれる。当時、カージャール朝はアゼルバイジャンの北部から東コーカサスをめぐってロシアと戦争していた（第一次イラン・ロシア戦争、一八〇四～一八一三）。カージャール朝の軍隊の主力は遊牧民部族の長などから供給される騎兵であったが、それに、はじめはフランス人、ついでイギリス人に訓練されたヨーロッパ式の装備をもつ歩兵・砲兵が加わることになる。これはサルバ

ーズとよばれ、イギリスの軍事使節団の長であったマルコムによれば、一二部隊、一二、〇〇〇からの兵力をもつものであった。しかし、遊牧民部族ごとに部隊分けされており、カージャール朝軍のもつ寄せ集め集団的な性質は払拭されるにいたっていない。このことはカージャール朝の年代記などでも確認できることである。整然とした指揮系統をもつ軍隊組織を作り上げようとする努力の跡もみられるのだが、成果が現れるまえに、イギリスからの補助金の打ち切りなどのため、軍事改革がうやむやに終わってしまうのである。

「一八九六～一九一六年間のカザフスタンにおけるロシアの植民地化の過程」

松長　昭

帝政ロシアが一八九六～一九一六年の二十年間に中央アジアのカザフスタンを植民地化していった過程を主にロシア側の資料から明らかにしようと試みた。

ヨーロッパ領ロシアにおいて余剰人口が増加した。これと帝政ロシア政府の東方政策にのり、この二十年間に多数のロシア農民が、ヨーロッパ領ロシアからアジア領ロシアに移住し開拓に従事した。カザフスタンではトルコ系の遊牧民カザフ族が、水草を追う遊牧生活をしていた。ロシアの植民地化する以前、大・中・小のオルダ（部族連合）がカザフ族を統治していた。ロシア農民はカザフスタンの入植地で草原の開拓に従事する一方、彼らはカザフ草原に水草を追う遊牧民との摩擦を起こすことも多かった、ロシアの植民地化の初期においてロシア側は入植地にコサックを入植させて、コサックの軍事力によってカザフ遊牧民を抑えていった。入植地で入植民と遊牧民との衝突が少なくなるにつれて、コサックの入植地は減少した。これに反して、ロシア農民の入植地が増加した。また、ロシア側はカザフスタンのカザフ族遊牧民の大部分を短期間のうちに定住化させて、農業を営ませた。

シベリア横断鉄道の一部開通により、ヨーロッパ領ロシアとロシア領ロシアとの間の物資や人的な交流が盛んになった。鉄道を利用することによって、大量の東方移住が可能になり、著しい数のロシア人農民が、東方に移住した。カザフスタンで収穫された小麦や家畜産品もヨーロッパ領ロシアに輸送された。

ロシアは、大量の農民を移住させることにより、着実にカザフスタンの植民地化を進行させていった。同時にカザフスタンをヨーロッパ領ロシアの食料供給地としての地位を確保していった。ロシア革命以後のカザフスタンの植民地化は、ソビエト化と名前を変えつつも行われていたのであった。

シェムセッティン・サーミーと雑誌『ハフタ』

石丸　由美

オスマン帝国において、一八世紀頃から顕著になった西欧列強の圧迫への一つの反応として、自己アイデンティティーの再確認としての言語、歴史への関心が強まり、同時に新たな文学の創造が為されるなど文化的な運動が高まりを見せていった。

こうしたなかで「民衆」を啓蒙化することこそ帝国を守り、社会を進歩させるために必要であるとし、特に民衆を無知の状態に置く言語に注目し、当時破竹の勢いで現われた新聞・雑誌において、アラビア語、ペルシャ語の諸要素が混じりあい難解極まりないオスマン語の改革を唱えるものが現われた。これらの動きが民族意識を生みだし、ひいては二〇世紀初頭からのトルコナショナリズムの下地となっていく。そしてこれらの活動を担ったのがアルバニア人サーミーであり、その発言の場となったのが一八八一年発行の雑誌『ハフタ』なのである。

本論では当時の国際状況下でのアルバニアの立場をふまえたうえで、『ハフタ』を検証し、アルバニアの地で民族的な意識の洗礼を受けたサーミーが、当時としては珍しい国家観―複合民族国家のオスマン帝国は各民族の文化的自立を達成することで維持存続できる―を背景に、民族的な意識が殆ど無かったオスマン社会にトルコ人意識を植えつけていった過程を論じ、トルコナショナリズムの先駆者としてのサーミー像をあきらかにしようと試みた。

民族・考古学専攻

縄文時代における植物質食料について

―エゴマの考古学的・民俗学的検討を中心に―

須田英一

エゴマはシソ科に属し、シソと近縁の一年草で、植物学的に見るとシソの変種として取り扱われている油料植物の一つである。原産地はインド及び中国とされ、世界的にはその分布が狭い。古名はエ（「荏」）といい、後にエゴマ（「荏胡麻」）と称された。古くは『養老令』・『延喜式』に記事がみえて中世には大山崎神人のもとでエゴマ油が独占的に扱われ、菜種油にとって変わられるまで経済の中心的役割を担っていた。中国、朝鮮などでは古くから栽培され、歴史時代にこれらの地域を通じてわが国へ渡来したと考えられていたエゴマが、近年各地の縄文時代の遺跡から発見され、わが国においてもエゴマの利用が非常に古く遡ることがわかってきた。このエゴマが現在でも限られた地域で自家用程度に栽培され、色々な形で利用されている。

本稿では、出土状況を明確にする上で遺跡出土のエゴマの考古学的検討を、コゴマの利用法を考える上でエゴマの歴史的検討及び民俗学的検討を行ない、縄文時代におけるエゴマの利用法を推定し、エゴマの植物資源としての重要性について考察を加えた。

その結果、現在までにエゴマの出土遺跡は長野県の6例を中心に、岐阜県・山梨県に2例、東京都・福井県に一例の十二例が知られ、縄文時代前期二例、中期八例、後期二例と中期を中心に分布している。出土状況については住居址内、住居址内の炉址・ピット・土器、さらには土壙、泥炭層と多種にわたる。また、出土形態には種子そのもの、いわゆる「アワ状炭化物」中よりいわゆる「パン状炭化物」中よりの三つが知られた。文献史料では、『東大寺正倉院文書』の天平年間の記録が最初で、『養老令』賦役令では「荏油」、つまりエゴマ油が貢納物の一

つとされ、『延喜式』には荏油が食用、薬用、灯油用、漆の混和物として各地から調達された記事がみえる。中世、近世にわたりこの他にも名称、産地、利用法などについて記載がある。一方、民俗誌資料によると、エゴマは現在においても東日本を中心に食用油、味つけの原料として重要な役割を果たしている。また、エゴマ油は乾性油であり、この特性を利用して以前より塗料として合羽、雨傘、油紙、ちょうちんなどの防水原料に用いられ、漆の混和物にも利用された。これらの点を援用して縄文時代におけるエゴマの利用法の推定と、それに関連する遺構遺物の検討を行なうと、エゴマの保存には土器が用いられ、調理には石皿磨石などが利用され、石皿はこね鉢としても用いられたと思われる。エゴマは種子をつぶしてパンに混ぜ食用にすること、種子を搾って油を調理用にすること、漆の混和物として利用することなど、多目的に利用されていたことが推定された。

以上、エゴマを取り上げて縄文時代における植物資源利用について考察した。生活用具類としての植物資源の開発度は非常に高い水準にあったと思われ、縄文時代の植物質食料研究は単に食料資源としてだけでなく、より広い資源利用といった点から捉え直す必要があろう。

弥生時代集落群の構造的変化とセツルメントパターンの展開過程

―東京湾沿岸地域における弥生時代中期～後期の事例を中心に―

安藤広道

大規模な地域開発が集中的に行われている東京湾沿岸地域は、開発に伴う深刻な遺跡破壊が進む反面、集落遺跡に関する膨大な量の資料が蓄積されてきており、遺跡群の同時存在の推定や、地域内の発掘調査密度の低さなどの様々な問題を抱えてきた、セツルメントパターンの研究に際して極めて良好な環境となっている。

本論文では、上記のような特色をもつ、東京湾沿岸地域の弥生時代中期～後期の集落群を取り上げ、細かく区分された土器編年を武器に、幾つかの河川流域におけるセツルメントパターンの具体的な展開過程を捉えようとした。そして、流域毎の展開過程の詳細な比較を行い、その類似点、相違点を整理した上で、それらの類似点、相違点を生ぜしめた諸要因の考察を行った。

その結果、各流域のセツルメントパターンの展開過程の基本的な流れを規定しているものとして、各河川流域に共通した、集落群の構造的変化が捉えられた。そしてその変化の内には、環濠集落を基本的集落形態とする集落群構造の導入と、東京湾沿岸地域におけるその独自の発展（環濠の消失と集落の拡散）

といった歴史的文化的要因が大きな役割を果たしていると推測された。

また、各河川流域のセツルメントパターンの展開過程には、幾つかの大きな相違点が存在しており、それらは、各河川流域の地理的条件（地形、土壌等）の相違と密接に対応していることが確認された。このことは、流域間に認められるセツルメントパターンの相違点が、多分に生態学的視点から説明し得ることを示している。

以上のように、本論文では、東京湾沿岸地域の幾つかの河川流域における弥生時代中期～後期のセツルメントパターンの展開過程を捉え、その類似点、相違点に関して解釈を行ってきたわけであるが、今後は、今回十分に行い得なかった隣接諸地域との詳細な比較なども行いながら、変化の要因に対するより綿密な検討を積み重ねていく必要があると思われる。

北武蔵における鬼高期集落の再検討

神野　信

本論文は、古墳時代鬼高期集落遺跡の多様性とその背景を埼玉北西部本庄台地における遺跡群の動態及び竪穴住居構造を中心とする集落遺跡の具体的様相の把握を通して明らかにするものである。

本庄台地において、古墳時代の集落遺跡は女堀川、神流川両流域に集中する傾向が認められるが、それぞれ異なったあり方を見せている。女堀川流域では、古墳時代前期からプラン、柱穴・カマド（炉）・貯蔵穴配置にきわめて強い企画性のある竪穴住居からなる集落遺跡が継続的に形成されており、その多種多量の出土遺物の内容から、これを祭祀・生産・消費活動を伴なう「拠点的」集落と捉えることができる。これに対して神流川流域では、神流川の自然堤防上に規模・構造的に企画性のない竪穴住居からなる集落遺跡が鬼高期以降、突然出現し、神流川の洪水によると思われる空白期をはさみながら跛行的に形成されている。そして、その出土遺物の構成及び量がきわめて「貧弱」であることを含め、女堀川流域の集落遺跡とは異なる性格――洪水の危険にさらされた安定的な集落形成に適さない地域の開発・経営に関連する仮設的な性格を持つ「出作り」的な集落遺跡と捉えることが可能であろう。

以上から本庄台地における鬼高期の集落遺跡は、その生産基盤の開発形態に応じて実に多様なあり方を見せていることが明らかとなった。そして更に大規模河川である神流川流域の開発に出作り的な集落を伴なうことなどから、古墳時代における開発には鬼高期に大きな画期を認めることができ、この「出作り」的集落の後背地に形成される群集墳のあり方などからその政治的な背景をうかがうことができる。

今後は奈良・平安時代集落遺跡を含めて「一竪穴住居二一世帯」などの感覚的な「前提条件」を排して、集落遺跡の持つ多様性・多面性を明らかにして行く必要があると考える。